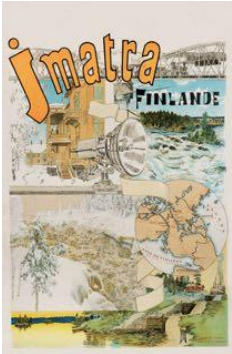


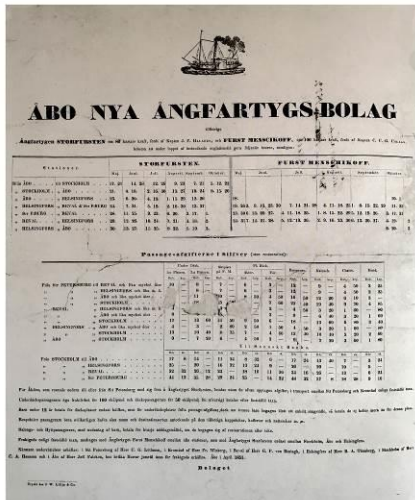
# フィンランド ビンテージ旅行ポスターデザインの背景ストーリー

## イマトラの滝



Akseli Gallen-Kallala アクセリ・ガッレン・カレラ 1893 年

旅行ポスターのそもそもの役割は、旅行のための情報を提示する事でした。例えば左の写真 1851 年の船の時刻表のように、船の時間や詳細の立寄港を示した表に少しイラストが入った程度のものでした。けれども次第



に、旅行ポスターの役割はただの情報提供源だけではありません。1800 年代の終わりに世界中で「ポスター芸術」というトレンドが高まり、それはフィンランドにも届きます。

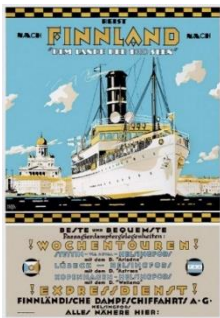
ポスターが芸術として認知され、さらにそれが広告としても使われるようになると、旅行業界はそれを「旅行」を販売するための最高の手段として利用するようになりました。こうしてフィンランドの旅行ポスターアートの歴史が始まったのです。

「イマトラの滝」は、のちにフィンランドを代表する画家となるガッレン・カレラの作品です。イマトラの滝のふもとに立ちデッサンを行ったガッレンカレラは、その滝の脇に設置されていた当時の画期的最新機器のスポットライトを中心に据える大胆な構図で、フィンランドの地

母神と呼ばれたイマトラの滝を捉えます。

この 1893 年の作品が、フィンランドが生んだ初めての旅行ポスターだと考えられています。

## バルト海の女王アリアドネ号



ハリー・ハドソン・ロドメル Harry Hudson Rodmell 1933 年

フィンランドの旅行業界や船に詳しい人に「アリアドネ」という名前を言ってみてください。きっとみるみる

うちに、誇りと望郷の思いにあふれた涙を浮かべるでしょう。このアリアドネ号は、1900年初頭当時フィンランドを西南の近隣国家とつないでいた、伝説の旅客船です。

蒸気船アリアドネ号は当時「バルト海の女王」と呼ばれました。アリアドネ号は、フィンランド蒸気船株式会社（FÅA）所有の客船で、なんと1914年から1969年の長期にわたり活躍しました。第一次世界大戦中には、ヘルシンキ港で病院船として活躍し、またその後のソ連との継続戦争中（1941-1944）にはフィンランドの戦争孤児をフィンランドの西海岸の都市ヴァーサからスウェーデンの東海岸の都市ウメオへ輸送しました。戦時中以外は通常の旅客船として多くの乗客を運び人々から憧れや愛情を一身に受けた船だったのです。

## オリンピック「空飛ぶフィンランド人」



イルマリ・シシメトセー（Ilmari Sysimetsä）1940年（左）50x70cm

1940年のオリンピックはフィンランドにとって世界中からの旅行客を集める一大イベントとして国中の期待を受けていました。そして、その旅行客を集めるという重大任務を請け負ったのは、他でもないポスターデザイナーだったのです。

1939年にこのオリンピックの公式ポスターを決める大規模なポスターコンテストが開催されました。そこで大賞を受賞したイルマリ・シシメトセーのオリンピック用のポスターデザインは、1920年代のフィンランド陸上のスター選手で「空飛ぶフィンランド人」と呼ばれ親しまれたパーヴォ・ヌルミを描いたものです。これは、現存するフィンランドのポスターの中で、恐らく世界的に一番有名なもので、様々な言語で作られました。そう、日本語版もあったのです！

ところが、その年ソ連との戦争が勃発し、ヘルシンキオリンピックは1952年まで延期となりました。そしていよいよ開催される1952年オリンピックのために、当然のように再度ポスターコンテストが開かれたのです。前回の大会受賞者、シシメトセーは、今回のコンテストでは審査員として参加していました。

2回目のコンテストには、前回よりもさらにたくさんの作品が寄せられましたが、審査員たちはこれぞという作品と出会うことができませんでした。

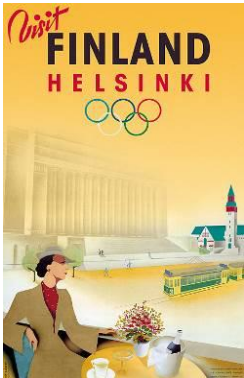
・・・さて、どうしたでしょうか。

審査員たちは、あまり揉めることもなく、シシメトセーの前回大賞の「空飛ぶフィンランド人」を公式ポスターとして採用することを決めたのです。フィンランドの地図をちょっと小さく修正し、日付を変えて…。ハイ出来上がり。

1952年のオリンピックは、貧しく戦争に疲れたフィンランドにとっての大転機点となりました。フィンランド人の多くはこのとき初めて黒い皮膚の人間を見ました。また初めてコーラ飲料を飲み、初めてチューインガムを膨らますことを学んだのでした。

展示の 1940 年の日本語版ポスターは、戦争の影響で実際には使用されなかったため、中でも特に希少価値の高いデザインです。

### シャンパンレディ



デザイナー：Jorma Suhonen ヨルマ・スホネン 制作年：1938 年

1940 年のヘルシンキオリンピックに向けて制作されたポスターの一つ。

当時のヘルシンキでは、まだ肌寒い午後にテラスでシャンパンを飲むという素敵な習慣があったのです。ほら、ちょうど今日みたいな午後に。このポスターにはフィンランドの素晴らしい首都ヘルシンキの、かつての姿が凝縮されています。近代的な国会議事堂。クラシックな建築スタイルの国立博物館。そして民衆が愛するトラム。しかももちろん、車は一台も通っていないのです！

今からさかのぼる事 16 年。フィンランド人ジャーナリストのマグヌス・ロンデンは、ヘルシンキのとあるアンティークショップのウィンドウに掛けられた、この「シャンパンレディ」のポスターを見かけました。そのモダンで優雅で、神々しいほどのオーラに満ち溢れた彼女の姿の前に、呆然と立ち尽くしました。その日から彼は旅行ポスターに取りつかれたポスター・ハンターになり、2017 年、フィンランド国立博物館で旅行ポスターを開催するほどの収集家となったのです。

### オリンピックアエロ



デザイナー：Jorma Suhonen ヨルマ・スホネン 制作年：1938 年

フィンランドを代表するグラフィックアーティスト、ヨルマ・スホネンが、1940 年に予定されていたオリンピックにあたり、アエロ航空（後のフィンエア）の依頼で制作したポスターです。オーランド諸島とストックホルムの間にある群島のセーデルム灯台が、飛行機の背景に描かれています。そう、この美しいフィンランドの群島はオリンピックで旅行客を集める時のアピールポイントの一つになると考えられていたのです。

## ヘルシンキ 400 周年



グンナル・フォシュストレーム (Gunnar Forsström) 1950 年

1949 年はヘルシンキの 400 周年の記念年でした。そしてもちろん、この特別な年を祝うための特別なポスターが必要だったのです。フォシュストレームはこの課題にチャレンジし、この輝く花火のポスターデザインで見事大賞を受賞したのです。キラキラ輝く特別な記念年にふさわしいデザインです。

お話はまだ続きます。2013 年の秋のある日、カムトゥフィンランドのポスター・ハンター、マグヌス宛に一本の電話がかかってきました。フォシュストレームが、この 400 周年のために起こしたオリジナルのデッサン画を所有しているというのです。あの有名な受賞デザイン以外に、実は 4 枚の全く違うデザイン案も作っていたのです。フォシュストレームが、このデッサン画を他の誰かに見せたのかはわかりません。しかし何世代にも渡って残されたこのデッサン画は、きっと彼にとって思い入れのある作品だったに違いありません。

\* このデッサン画は、展示会会場またはポケット・ブック内でご覧いただけます。

## フィンランドでの休日



イングリッド・ホグストロム・バーデ (Ingrid Högstrom-Bade) 1936 年

この時代にはとても珍しかった女性アーティストのイングリッド・バーデ。実はスウェーデン出身の女性ですが、フィンランド人芸術家エドムンド・バーデと結婚し、ヘルシンキで暮らしました。グラフィックデザイナーとして働く傍ら、フィンランド・オペラの衣装デザイナーとしても働きました。

1945 年、夫と共にスウェーデンに戻ったバーデはその後すっかりフィンランドからは忘れ去れてしまいました。しかし彼女のポスターデザインは、1930 年代のアールデコを思わせる独特な雰囲気を持ち、誇り高く美しい、景勝地としてのフィンランドを描いています。バーデの作ったデザインの旅行ポスターは、フィンランドを象徴するデザインとして、ずっと人々に愛され続けてきたのです。

## 湖とコテージ



アウクスティ・トゥーカ (Aukusti Tuhka) 1937 年

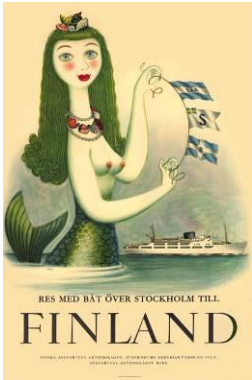
このポスターをじっくり見てください。白いゆったりとした煙が、そこかしこで空へ向かって流れ出ているのがわかります。この煙は、フィンランド人が好きなサマーコテージでの過ごし方をとても良く物語っています。

「お隣さん？もちろんいいとも。でも近すぎない距離でね！」

そう、湖一つにコテージ一軒くらいがちょうどいい感じ。フィンランドのゆったりとしたライフスタイルや人々の様子を表現した素晴らしい作品です。

このポスターデザインのもう一つの素晴らしいところは、ワクワクそわそわした旅行者たちを乗せた鉄道の姿が、空へと登る白い煙と同じトーンで、素晴らしいハーモニーを保ちながら描かれているところではないでしょうか。

## マーメイド



アルバート・アンダーソン (Albert Andersson) 1952 年

この人魚のポスターに小さく残された「ABBE」のサイン。一体誰のものなのか、私たちは何年も何年も調べ続けていました。しかし何年かけてもその正体を突き止めることはできず、最終的に「ABBE はいったい誰ですか?!」という書き込みをインターネットに残しました。そしてその1年後、スウェーデンからある1通のメールが届きました。「ABBE はアルバート・アンダーソン (Albert Andersson)、私の父です！」

私たちは喜びに沸きました。そしてさらにアンダーソンの娘さんは、次の素晴らしいエピソードを聞かせてくれたのです。

「父は、このポスターの人魚の鱗を描く時、アトリエの屋根から生の魚をつるして光がどんなふうに鱗の上で動くのかを細かに観察していたわ。そしてついにデザインが完成すると、依頼主であるフィンランド蒸気船株式会社 (FÅA) の執行部が人魚の乳首の色が強すぎて挑発的過ぎるとクレームを言ってきたそうよ。それで父

はその色を薄くするように命令されたの。父は注文通り色を修正し、やっとOKをもらったのよ。だけど、父の中では最終的なポスターイメージがはっきりと決まっていたから、印刷に出す直前に誰にも言わずに色をまた元に戻してしまったんですって！」

そしてここに、アンダーソンがこだわったその色を見ることができます。

このポスターはスウェーデン人向けにはフィンランド語で、フィンランド人向けにはスウェーデン語でと2種類が作られたそうです。

## フィンランドの夏と冬

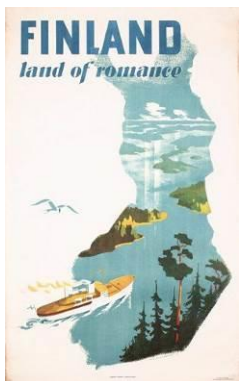


エリッキ・ヘルツタ (Erkki Hölttä) 1948年

この2部構成デザインのポスターは、フィンランドが夏でも冬でも旅行先としてうってつけであることを、分かりやすく簡潔に描いています。この落ち着いて調和のとれた素晴らしいデザインに喜んだフィンランド観光協会は、1948年のポスターオブザイヤーの大賞を与えました。

1940年前半まで、世界大戦やロシアとの戦争を経験したフィンランド。このポスターが作られた時代はようやく戦争が終わり、明るい生活への兆しが見えてきたころです。そして同時に国の復興のために、観光業に力が入れ始められたころでもあるのです。

## ロマンスの国フィンランド



ヘルゲ・メーテル＝ボリイストレーム (Helge Mether-Borgström) 1950年

西側から、千の湖の国フィンランドにゆったりと入る船が印象的なポスター。フィンランドの魅力の一つでもある数千の湖や、ゆったりとして美しい自然が見られます。「フィンランド、ロマンスの国」というスローガンも印象的です。

デザイナーのボリイストレームは1935年、フィンランドの中央芸術学校を卒業。グラフィックデザイナーと

して活躍しました。ポリストレームは日本でも人気の高いマリメッコの創始者アルミ・ラティアと友人関係にあり、1954年ラティアが作った新しい会社マリメッコのためにロゴデザインを行いました。

### 夏の楽園ハンコ



作者不明 1930年代

1930年代に、フィンランドがポスターに太陽やビーチを描き始めた時、正直ちょっと、苦しい感じがしましたね。でも私たちはそんな無茶をするフィンランドも大好きです。

1930年代の傲慢な人々はこんな風さえ言っています「フィンランドで一番素晴らしいもの、それは天候」。そもそもビーチでこんがり日焼けする習慣は、もともとフィンランドにはありませんでした。それがあのフランス人のファッションアイコン、ココ・シャネルが、1923年カンヌからこんがり日焼けして帰った姿がメディアに現れてから、それは流行に変わったのです。

シャネルの日焼け姿がメディアに登場した後すぐにフィンランドきってのビーチリゾート地、ハンコは人気観光スポットになりました。そして30年代には、男性も日光浴を楽しむ時代になったのです。

このハンコのポスターデザインの左端に描かれた人物をご覧ください。こんなオシャレになれる人は、今だってそうそういないのではないのでしょうか？

このポスターデザインのメッセージは明確です。「ココ、リビエラなんて忘れて！それよりハンコにいらっしやい！」

### サイマー湖の眺め



ポール・セーデルストロム Paul Soderstrom, ヨーラン・エングルンド Goran Englund 1939年

「森と湖の国」と呼ばれるフィンランドの魅力を凝縮した、フィンランド東部にあるサイマー湖の様子を描いた美しい作品です。このポスターは、英語とフランス語で作られ世界中に向けてフィンランドの魅力をアピー

ルしていた当時の様子が伺われます。また、2012 年にはフィンランド郵便局の公式切手としても採用されたデザインです。

このポスターをデザインしたセーデルストルムとエングルンドはどちらも 1931-1934 年フィンランド中央芸術学校で学び、卒業後に後にフィンランドを代表するデザイン会社となる SEK 社の基盤を立ち上げました。このポスターをデザインした二人は当時 28 歳の若者でしたが、その直後ロシアとの冬戦争で前線へと駆り出されます。エングルンドは終戦直前にカレリア地方で負傷しそのまま帰らぬ人となりました。セーデルストルムは前線の様子を伝える戦争画家として送り込まれ、たくさんのスケッチを残しました。これらのスケッチは現在ヘルシンキの戦争ミュージアムで見ることができます。

戦争に運命を翻弄された若者が描いた美しい自然にあふれるフィンランド。私たちの心に染み入ります。

### フィンランド最古の街、トゥルク



マルッティ・ミッケネン Martti Mykkänen 1965 年

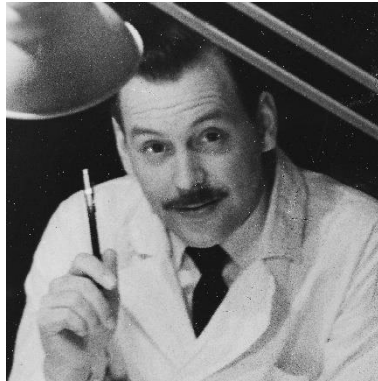
このポスターの題材となっているフィンランド南西部に位置する街トゥルクはフィンランド最古の街。また 1812 年までフィンランドの首都でした。もちろん現在はヘルシンキがフィンランドの首都ですが、「伝統的な街」として今でもフィンランドの人々が誇りに思っているのは、このトゥルクなのです。

フィンランドではもともとフィンランド語の他にスウェーデン語が国の公用語とされているため、地名に 2 種類の呼び方が存在するからです。例えば、このポスターではフィンランド語名のトゥルク (Turku) とスウェーデン語名のオーボ (Åbo) が並べて表記されています。こうしたポスターからは、バイリンガル国家としてのフィンランドの姿も垣間見ることができます。

デザイナーのミッケネンはフィンランドで 450 以上の本の装幀を手掛け、また数多くの企業ロゴ、製品パッケージ等を行った人気グラフィックデザイナーです。



## タンペレ



ロルフ・クリスチャンソン Rolf Christianson 1955年

タンペレは人口 20 万人のフィンランド第2の都市。昔から繁栄した製造業の街として栄え、フィンランドのマンチェスターと呼ばれ、たくさんの工場が並んでいます。1950年代、工場地帯だったこの街は、次第に人口が増えていきました。このポスターでは、工場を背景に、幸せそうに暮らす大人や子供たちの生活が描かれています。また、タンペレは現在「ムーミン谷博物館」があり、日本からも多くの観光客が訪れています。デザイナーのクリスチャンソンは、1950年代に当時ポスター芸術の最先端だったスイスで学び、構成主義の典型である「厳格的なグラフィック」のスタイルを貫きました。クリスチャンソンはチューリッヒで身に着けた構成主義のセオリーをうまく作品に落とし込み、ポスターや切手デザイン、その他のグラフィックアートの分野で広く活躍しました。

## アエロ



ヨルマ・スホネン Jorma Suhonen 1933年

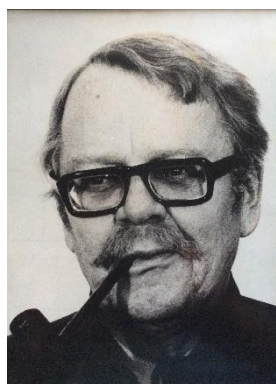
ヨルマ・スホネンの代表作ともいえる1枚。アエロ航空の Ju 52/3m 機が、ヘルシンキの街のど真ん中にある大聖堂の上を横切る大胆な構図です。でもこれはスホネンが脚色して作った構図ではなく、当時としてはそれ程驚くことでもなかったのです。

当時ヘルシンキにはいわゆる普通の「飛行場」というものではなく、飛行機はヘルシンキ市内の東部海岸にある半島カタヤノッカ島近くのターミナルで離着陸していました。ターミナルと言っても、それは水の上に浮かんだ舟橋でした。飛行機の運航開始から数年たってやっとヘルシンキ北郊外のマルミに初めての飛行場がオープンしたのです。

また、フィンランドの航空会社（アエロ）と、スウェーデンの航空会社（ABA）が「スカンジナビア・エア・エクスプレス(Scandinavian Air Express)」という共通名で、一緒に仲良く運航していた当時の様子は、なんだか

ても感慨深いものがあります。

### スキーボーイ



オスモ・カレヴィ・オクサネン (Osmo Kalevi Oksanen) 1957年

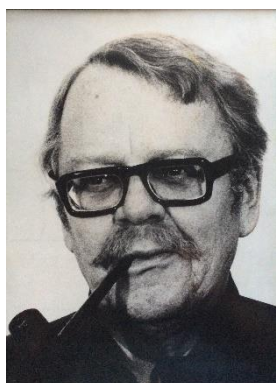
1950年代のフィンランドのポスターデザインの中に新しく登場したものは「陽気さ」でした。それは過酷な戦争が続いた1940年代からの反動だったに違いありません。またこの時代ヨーロッパには新中産階級が生まれました。その証に、旅行ポスターデザインの中に子供の姿が見られるようになります。これは人々が家族で旅行を楽しむようになったという革新的な事実を表しているのです。

フィンランドポスター界の巨匠、オスモ・カレヴィ・オクサネンは、まさにこの頃1945年にヘルシンキの中央芸術学校を卒業しました。

この愛らしいスキーボーイのポスターデザインは、オクサネンの数あるポスターデザインの中でも最も有名なものです。スキーボーイのモデルになったのはオクサネンの娘、マリ・オクサネン。オクサネンは、スキーを持った娘を自宅の庭に立たせ、オクサネン夫人の化粧バッグを持たせてデッサンを行ったそうです。

制作の最終段階で、オクサネンはデザインの中の女の子を男の子に変えました。そして、このオクサネンの代表作が誕生しました。このポスターには、フィンランドで生きるために必要な物が全て描かれています。スキー、フィンランド鉄道、そしてスーツケース。あとは少しの冒険心。

### アンブレラボーイ



オスモ・カレヴィ・オクサネン (Osmo Kalevi Oksanen) 1950年代

スキーボーイで有名なオスモ・オクサネンの貴重な別バージョン。これは、同じ構図で書かれた冬のバージョンを、夏バージョンに変えたもの。スキーボーイに比べると圧倒的に印刷部数が少なく、レアなバージョンで

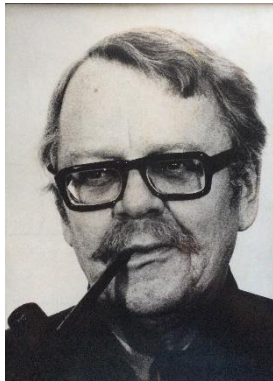
す。

1930年代、「フィンランドで一番素晴らしいのは天候」などと言い切るほど傲慢だったフィンランド人も、戦争を経て現実的になりました。そこでこの夏バージョンの男の子が持っているものは…。

そう、フィンランドの夏に絶対必要な物。

もちろん。傘ですよ。

## ウィンタースポーツ



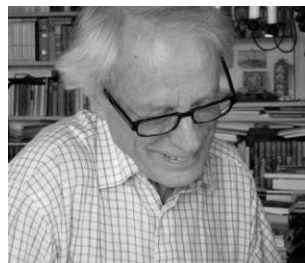
オスモ・カレヴィ・オクサネン (Osmo Kalevi Oksanen) 1948年

もう夏なんか忘れて。だって冬こそがフィンランドの本当の切り札なのですから。

毎冬シーズンごとに新しい旅行ポスターを作ってフィンランドの冬を宣伝し続けたのは、フィンランド国鉄でした。国内外の旅行者が万が一にも間違いを犯さないように。国鉄の主張はひとつ「北フィンランドを訪れるなら、必ず列車で行くように」。

赤い手袋が印象的なこの作品からは、フィンランド人がいかに冬を愛しているかが伝わってきます。背景を走る鉄道。シュプールを描いてスキーを楽しむ人々。巨匠オクサネンらしいタッチでフィンランドの冬が描かれています。

## サーモン・フライト



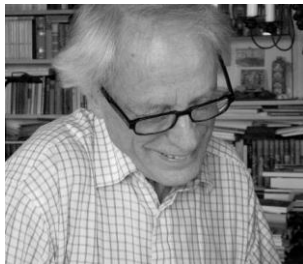
エリック・ブルーン (Erik Bruun) 1957年

ブルーンは今日誰もが認めるフィンランドのポスターアート界の大御所で、彼以上に海外の旅行者たちをフィンランドに惹き付けることに貢献した人はいないといえるでしょう。

エリック・ブルーンは釣りが趣味で、何度かラップランドへのフィッシング・ツアーに参加していました。アエロ航空からラップランド路線のポスターデザインの依頼を受けた時、あの機内にあふれる楽し気な釣り客の

様子を思い浮かべ、ラップランドへの旅行のポスターデザインに最適なモチーフは「魚」だと思いつき、大胆な魚の飛行機をデザインしました。しかし依頼主であったアエロ航空の執行部は当初「魚の飛行機なんかで旅行したいと思う客がいるわけない」と、大反対しました。しかしブルーンのこの傑作がその後、その年の最優秀ポスター賞を受賞すると、アエロ航空もこのポスターの広告的価値を理解しました。このポスターは色々なカラーで何千枚も印刷される大ヒットとなったのです。

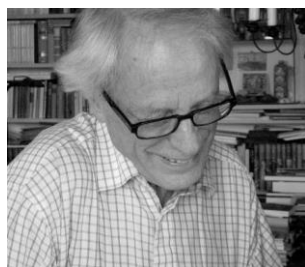
## ヘルシンキ



エリック・ブルーン (Erik Bruun) 1962年サイズ

ブルーンの、ヘルシンキを描いたこのモノクロのポスターは、街全体を上から見下ろす形で大聖堂はじめその他の重要な建築物が描かれています。どこか幾何学的な形で構成されたこのポスターは、驚くほどスタイリッシュで、モダン。同時代、そして後世の多くのアーティストたちにインスピレーションになったと言われています。

## サーモン・ボート



エリック・ブルーン (Erik Bruun) 1957年

葉巻の煙突に並ぶアルファベットは、株式会社ボーレ (Bore)、ストックホルム運送船会社 (Svea)、フィンランド蒸気船株式会社 (FÅA) の三つの船会社名。1957年にこの3社は合併しシリア (Silja) 株式会社を設立しました。この巨大な新会社シリアの依頼で、ブルーンは船をテーマとしたポスターを制作しました。

ブルーンが作ったデザイン、それは豪華なスモーガスボードです。北欧の食文化を大胆に表現しました。サーモン、エビ、ラディッシュ、レモン……。サーモンが船体になったり葉巻が煙突になったり、ブルーンの人柄を表すような、ユーモアにあふれた作品です。